

西垣千春著『老後の生活破綻 - 身近に潜むリスクと解決策 - 』（中公新書、2011年）

日本では、高齢社会の到来により、老後生活にどのようなリスクがあるのかが国民の関心事となっている。高齢者の増加に伴い老後の生活設計に関する指南書や年金問題に関する類書が数多く出版されているが、それらを読み、指南された生活準備をしたとしても、不安は去らないのではない。老後生活は、これから足を踏み入れる人にとって未知の体験であることや指南書等で提案される自助努力による「備え」が一層準備の不全感を高めること、なども考えられる。

本書は、この老後における問題を、著者が関与する大阪や八尾市における社会貢献事業など具体的な事例により、「生活破綻」という切り口から接近し、その対応策を提起したものである。

本書では、まず、身体能力が低下する高齢期の長期間化、血縁や地縁の希薄化、収入格差の拡大が貧困に繋がる家計など変容する高齢者を取り巻く環境の現状を報告する（第1章 高齢化の現実）。このような環境下において、見通せていた老後生活が、自らの判断力の低下、健康状態の変化、近親者による経済的な搾取や依存、予期せぬ事故や災害被害の遭遇など誰にでも起こりうる事柄により、瞬時に生活困窮に陥りかねない実態を浮き彫りにする（第2章 事例で見る生活破綻）。さらに、老後生活の困窮が、高齢者に不可避的なセルフマネジメント能力の低下、家族や地域など人間関係の希薄化から、周囲から見え難くくさせる「孤立」の実態に触れる（第3章 高齢者特有のリスク）。一方、高齢者を支援する行政による制度やサービスの拡充の経緯と具体的な制度内容が示されるが、利用者にとって不可欠な情報提供の不全が利用者、サービス提供者の双方から取り上げられる（第4章 サービス利用の有無を分けるもの）。このような現状において、高齢者のなかに、社会から取り残された人の発生、多様性のなかでの生活設計の難しさ、生きる糧となる希望を持つことの大切さが、解決されていない課題として提起される。これに対し、同問題の解消に取り組む「福祉先進地」大阪の社会貢献事業活動、行政と民間の協力による八尾市における事業展開 - 特に、「委託型地域包括支援センター」における相談活動の過程として本人と直接接するコミュニティソーシャルワーカーの判断により、課題解決に必要な諸費用を本人に変わり支払われる制度 - が、報告される（第5章 高齢者の生活破綻を防ぐために）。

本書は、高齢者を取り巻く“プロセス（経路）”に着目し、老後生活の困難に立ち至る過程をリアルに描き出す。高齢期の生活は、高齢者自らの心身の状態と周囲の人間関係の希薄化といった変容を伴うことにより、個々人の生活課題が多様な現れ方をし、さらに、その課題にうまく対処できない場合は急速に生活破綻へと転落する。つまり、老後生活の不安とは、自らのセルフマネジメント能力が低下するなかで、生活の「不確実性」が拡大することに特質があるといえる。このような生活課題に対する有効な方策は、自助努力による「備え」ばかりでなく、高齢者に向けた医療や介護、生活援助といった幅広いセーフティネット（既存の制度やサービス）の活用が不可欠といえる。しかしながら、利用者が、その制度やサービスの提供を受ける場合には、その手続きに時間が割かれ、修復不能な事態に立ち至るケースが少なくないのが実情だ。生活破綻を回避する方策では、行政による臨機応変な関与も求められている。

日本における高齢者に対する支援制度やサービスは、行政による措置から自らの権利に基づく相互扶助による保険への転換を通して、徐々にではあるが拡充している。高齢者は、自らが選択できるという自由度が高まった反面、複雑化し専門性がより求められる制度やサービスからの選択を求められる。高齢者の生活の「不確実性」への対応には、地域において、制度やサービスの利用を総合的に支援する専門家（集団）の育成・配置とその制度に繋ぐ高齢者に寄り添った人間関係の厚味の重要性が益々高まっていることを、本書は教えてくれる。私たちは、地域において、そのような豊かな人と人との繋がりを構築できるだろうか。（井出 久章）